

## POW 研究会主催講演会 第2次世界大戦に出征したアボリジナルの兵士について

Garth O'Connell (ガース・オコネル) オーストラリア戦争博物館学芸員

2019年12月14日午後2時～6時 於：日仏会館 507号会議室

### ガース・オコネルさん自己紹介

私の4人の祖父母のうち一人はアボリジナルだった。この祖母にだけは生前会ったことがある。他の3人の祖父母は白人だったが、私が生まれる前に亡くなっていた。私は小さいころアボリジナルの住む一画で暮らし、強い影響を受けたと思う。その後シンガポールで育って、成人してからオーストラリア軍に入り、ソロモン諸島などの治安維持に派遣された。その後イラクに派遣され、現在はオーストラリア戦争博物館の学芸員として働いている。



アボリジナルの社会には色々な肌の色、外見の人がいるので、白人か黒人かアジア系に見えるかという外見より、家族のつながりや家系を大事にする。どの地域の出身か、どういう家系かが重要で、どこそこの誰の親類かが分かれば、それで仲間として受け入れられる。今アボリジナルは、オーストラリアの人口のわずか3%しかいない。しかし変化のきざしはある。2000年のシドニーオリンピックで、アボリジナル出身のキャシー・フリーマンが400m走で金メダルを取った。彼女はウィニングランで、オーストラリア国旗とアボリジナルの旗の両方を肩にかけてトラックを走った。長年のアボリジナル迫害の歴史に転機が訪れ、それ以降は和解のプロセスが今も続いている。自分はアボリジナルの文化と白人の文化の両方を受け継いでおり、両者の仲介役になれると思う。

### アボリジナルの歴史と軍隊

オーストラリアには国旗のほかにアボリジナルの民族旗がある。赤い大地と黒い肌の色そして太陽をデザインしたものだ。またトーレス海峡諸島の人々にはまた別な民族旗がある。青い海と緑の大地を表す旗だ。オーストラリアに白人がやってきたのは1770年で、それ以降先住民の人々は迫害され、大陸各地に生活していた100万人のアボリジナルの



左アボリジナルの旗

右トーレス海峡諸島の旗

人々は20世紀の前半には8万人にまで激減した。700あった言語で、今残っているのは30しかない。

1883年から1975年までパプアニューギニアはオーストラリア領で、パプアニューギニアとオーストラリアの間のトーレス海峡諸島、バヌアツ、ニューカレドニアなどの島々の住民はクィーンズランド州の支配下に置かれ、6万人が奴隷にされてサトウキビ産業で働かされた。その後一部はニューサウスウェールズに移動し、第2次大戦では多くが軍隊に入った。シンガポールで捕虜になったオーストラリア兵の一部には、こうしたアボリジナルの人々がいた。当時アボリジナルの人々は下級市民として扱われ、人権が無く人口にも数えられていなかった。しかし軍隊の中でだけは衣食住も訓練も白人兵士と平等に扱われ、給料ももらえた。そこで多くのアボリジナルが志願して軍隊に入った。

第二次大戦ではシンガポールなどで1万5000人のオーストラリア将兵が捕虜になったが、そのうち81人がアボリジナルの人々だった。実際はもっと多かったかもしれないが、色が黒くないアボリジナルは、その民族を隠したのでアボリジナルに数えられていない。そして捕虜になったアボリジナルの80人中32人が死亡した。死亡率は39%で白人捕虜の平均(34~35%)よりやや高い。

有名なカウラの大脱走は、アボリジナルの土地で起きたことなので、多くのアボリジナルはその経過

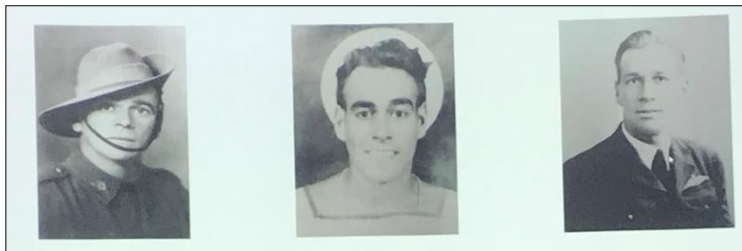
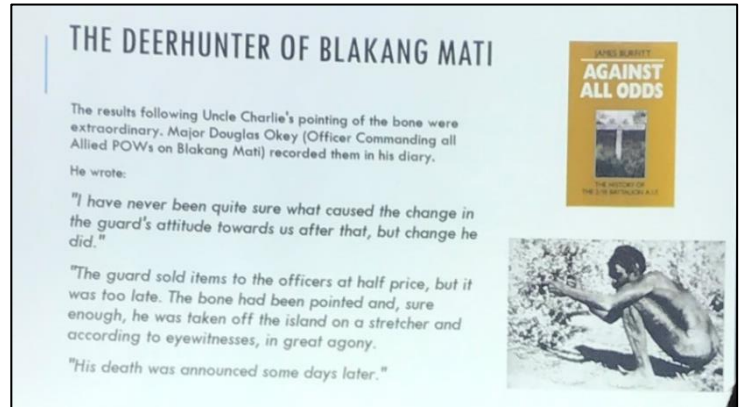
を見ており、日本人に同情する者も多かった。そもそもアボリジナルは自分たちの居住地を追われて、条件の悪い居留地に閉じ込められているので、捕虜と自分たちの境遇を似ていると思ったのだろう。

多くのアボリジナルは、家族や伝統的な一族のつながりの中で軍隊に参加し、アボリジナルの人々と国と軍のために戦った。私の大叔父のフレデリックとジョージのビール兄弟はニューサウスウェールズ出身だったが、軍隊に入り捕虜になって日本へ送られ、直江津の捕虜収容所に入れられた。そのうちジョージ・ビールは収容所で亡くなった。アボリジナルの兵士の中には、第1次世界大戦に出征し勲章を授けられた者もいた。歴史家ジャッキー・ハギンズの父もそうだった。第2次世界大戦でドイツ、イタリアの捕虜になったアボリジナルの兵士で、死んだ人はいない。死んだのは日本軍に捕まった人だけだ。

## アボリジナルの兵士たち

これは、有名なブラカン・マチの話だが、チャーリーと呼ばれるマチは、捕虜収容所で日本語を覚えて看守と仲よくなり、時々食べ物を多めにもらっていた。ある時マチはディア・ハンターとあだ名で呼ばれる看守から、ひどい目にあわされた。彼はオーストラリア軍に黒い人がいるとは思わなかったのだから、マチをインド人だと決めつけた。当時日本人はアボリジナルの人々を知らな

かった。アボリジナルにはポインティング・ボーンと言って、恨みを持った相手にワラビーの骨を向けて呪いをかける風習があった。マチは落ちていたチキンの骨を拾って、それを看守に向け呪いをかけた。するとその結果看守はひどく苦しんで数日後に死んでしまった。これはディア・ハンター事件と言って、有名な事件だ。マチは色の黒いアイランダーで、第1次世界大戦にも出征したベテランだった。少佐になって部下に命令を下す立場だったが、シンガポール陥落で捕虜になり、泰緬鉄道で働かされて亡くなった。

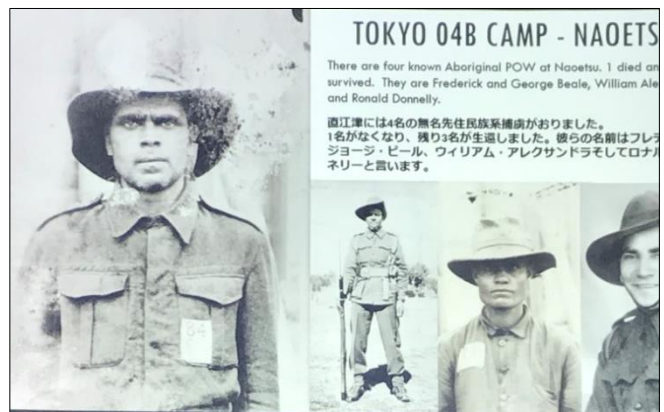


これはオーストラリア軍に入ったアボリジナル3兄弟の写真。左が長男で陸軍、真ん中が次男で海軍、右が三男で空軍のパイロットになった。当時多くのアボリジナルの人々が戦争に参加した。軍では唯一白人と同じ給料がもらえた。それ以

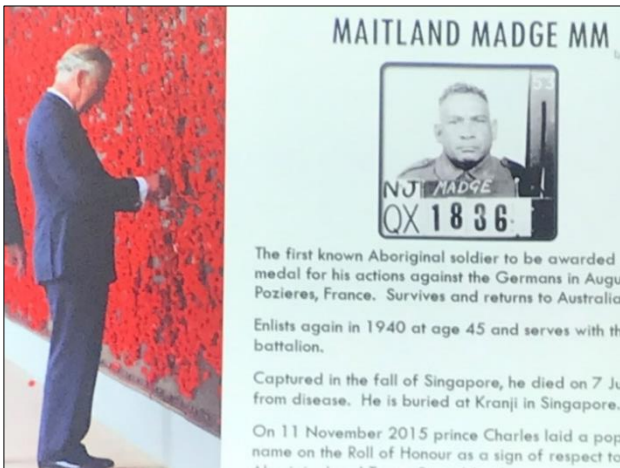
外の仕事では3分の1程度しかもらえなかった。

直江津にはアボリジナルの捕虜が4人いた。そのうち1人が私の大叔父のジョージ・ビールだったが、収容所で亡くなり、あとの3人は生還した。ジョージは保土ヶ谷の英連邦墓地に埋葬されている。

海南島で働かされて亡くなったオーストラリア兵の中にもアボリジナルはいる。保土ヶ谷の英連邦墓地に埋葬されている。



直江津捕虜収容所のアボリジナルの兵士



### メートランド・メッジに花を奉げる英国皇太子

メートランド・メッジは父が日本人母は白人だったが、自分はアボリジナルと結婚した。イデは戦前、ラグビーのナショナルチーム、ワラビーズのメンバーとなった。しかし戦争で日本軍の捕虜になり、ボルネオの捕虜収容所に送られた。その後日本の捕虜収容所に送られる途中、楽洋丸で空襲を受け亡くなった。ウィンストン・イデは、外見はアジア系で色も白かった。アボリジナルにはこのような人もいた。

彼のチーム・メイトの中で最も仲がよかったのが、インド出身の父とアボリジナルの母を持つセシル・ラマリだった。ラマリも捕虜になったが、長崎に送られ原爆を生き延びて帰還した。

アボリジナルの兵士で特に有名なのは第1次大戦に出征して武勲を上げ勲章をもらった、メートランド・マッジだ。彼は第1次大戦での活躍で尊敬されていたからだろうか、第2次大戦にも出征したが、シンガポール陥落で捕虜になり1944年に亡くなった。戦後イギリスからチャールズ皇太子が戦争記念館・博物館を訪れた時、殉国者の代表としてポピーの花を奉げたのがこのメートランド・マッジだった。

ジャッキー・ハギンズもアボリジナルの兵士で、戦後アボリジナルの人々の権利拡大の運動の先頭に立った。

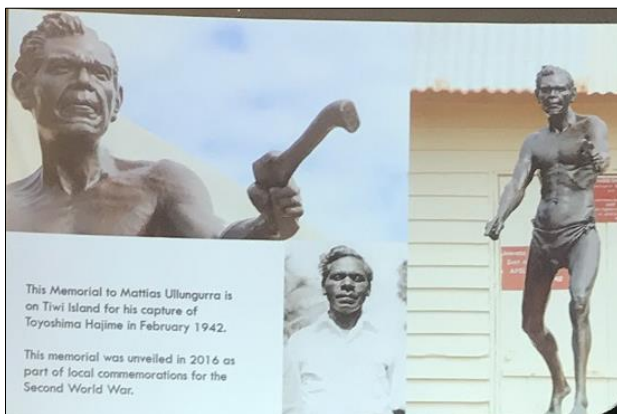


ラグビー選手

ウィンストン・イデ

### 捕虜第一号になった豊島と彼を捉えたアボリジニ

日本軍で最初にオーストラリアで捕虜になったのは、ダーウィン空襲に出撃した豊島一だった。ダーウィンには連合軍の飛行場があり、弾薬や石油も備蓄されていた。日本軍はジャワやチモール攻撃を安全に行うため、1942年2月大規模な空襲を行なった。空母から発進した約180機の飛行機が攻撃したが、その途上にメルビル島があり、アボリジナルのコミュニティがあった。メルビル島にはラジオの電波塔があったため攻撃目標になり、6機の日本軍機が空襲した。そのうち1機は燃料タンクに被弾して穴があいてメルビル島に不時着した。これは日本軍の規定通りの行動で、不時着すればそこに日本軍が行って救出することになっていた。しかし実際には救出部隊は来なかった。パイロットの豊島一は着陸の衝撃で顔に怪我をしたが、命に別状は無かった。近くにいたアボリジナルの少年に時計を見せて、助け



豊島を捉えたマティアス、手に持つのはトマホーク

を求めようとしたが、少年は投げられた時計だけ拾って逃げてしまった。その後うしろから忍び寄ったアボリジナルの男性マティアスが、斧(トマホーク)の柄を彼の背中に突きつけ、「手を上げろ」と言って豊島の拳銃を取り上げ、彼を捕虜にした。最近メルビル島に彼の銅像が出来て有名になっている。また豊島は武器を持っていたのにそれを使わず誰も傷つけなかったことから、現地の人々に尊敬されている。その後豊島はカヌーでオーストラリア軍の通信兵がいたバサスト島に送られた。バサスト島には通信施設を守るため、たった1人のオーストラ



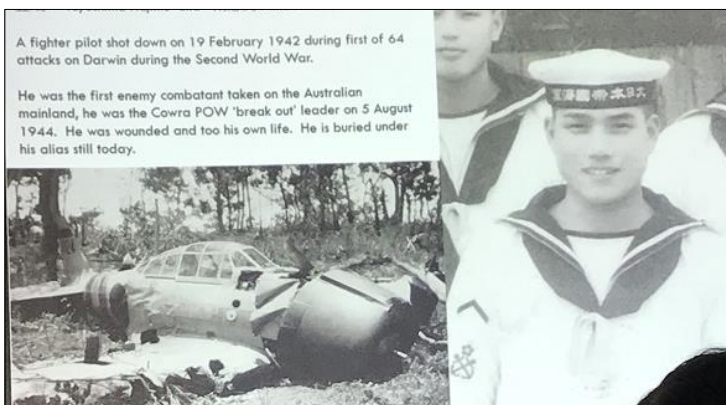
リア兵がいただけ、彼は1丁の銃を持っていただけだった。それでも島の守備が出来たのは、アボリジナルの社会が彼を支えていたからだ。

## 豊島一の親族との出会い

私は先週、香川県の善通寺市を訪れ、現在 80 歳代の豊島の甥に会った。会ってオーストラリアでは有名人である豊島の話をした。イギリス人はアボリジナルの人々を殺しまくったが、豊島は不時着した時武器を持っていたのに、それを使わなかったのが、私はその点を尊敬している。豊島はオーストラリアでは有名で、戦争に巻き込まれた人物の1人として認識され、敵意などは持たれていない。

彼の遺品である、梅の花の刺繍をしたサウザンステッチ・ベルト（千人針）や、彼がカウラ事件の脱走の合図に用いたトランペットは、現在オーストラリア戦争博物館が所蔵している。遺族にそのことを伝え、それを公開展示することの許可を得る必要もあった。豊島の家族には是非キャンベラに来てほしい。そして豊島の遺品など資料を見てほしい。遺品は倫理的には遺族に属しているのだから、敬意を持って接している。

豊島の家族に会えたのは良かった。ただ意外にもメディアが来ていたので、緊張もありゆっくり話せなかった。遺族は私から豊島のことを聞いて色々と知ることになり、涙を流していた。私も感傷的になった。豊島一の兄弟もニューギニアで戦死していること、そして彼（遺族）もそこへ行って祈ったことなどを話してくれた。善通寺は日露戦争の捕虜や、第一次世界大戦のドイツ人捕虜がいたところでもあり、興味深かった。



メルビル島に不時着した豊島の戦闘機



捕虜時代の豊島と、カウラ脱走事件の合図に使ったトランペット

## 直江津捕虜収容所跡訪問

直江津には私の親戚のビール兄弟 2 人が収容されていた場所なので行って来た。行ったおかげで、弟のジョージ・ビールが亡くなった時、その世話をした（陸軍病院の）日本人看護婦の話を初めて知った。看護婦に、ジョージ・ビールは、よく手を振っていた。彼が怪我をして死にそうな時、その看護婦を見て、ジョージはにっこり笑ったんだ。ビール兄弟は、私のアボリジナルの祖母の従兄弟に当たる。私は直江津に行って、大きなエネルギーをもらったように感じた。ビール兄弟のうち、生き残って生還したフレデリックの息子は、ベトナム戦争に従軍した。私とは仲良しだった。

フレデリック・ビールの直系の子孫は、まだ誰も直江津に行っていない。貧しくて行けないのだ。行けるものなら行きたいだろう。アボリジナルの人々は何世代にもわたり軍隊に入っている。軍隊だけが同じ給料や待遇を与えてくれるからだ。イギリスがオーストラリアを侵略した時、アボリジナルの男性から伝統的な戦士の役割を奪い、社会の最底辺に置いた。しかし軍に入ればアボリジナルの人々も再び戦うことができる。軍隊の中には階級があり、それを階級章が表しているが、それもアボリジナル社会

の入れ墨と似ている。アイランダー（トーレス諸海峡諸島民）にとっても、アボリジナルの影響は強い。

アボリジナルの人々は4万年前から同じ言葉をしゃべり、オーストラリアで生活を続けている。私はアボリジナルと白人の両方の出自を持つが、自分たちの土地にいと、祖先の息遣いを感じる。

## オーストラリアの軍隊とアボリジナルの人々

オーストラリアは第1次世界大戦で初めて自前の軍隊を海外に派遣した。当時徴兵制は無く、軍に入ったのはすべて志願兵だった。人口500万人の国で40万人近くが志願した。政府は徴兵制を導入しようとしたが、2度にわたり議会で否決されて導入できなかった。オーストラリアには建国記念日に当たる日が2日あって、1つがオーストラリアデー、これはイギリスがオーストラリアを侵略した日だ。もう1つがアンザックデーで、第1次世界大戦にオーストラリアとニュージーランドが参戦した日だ。この参戦によって、オーストラリアは国家の基盤を作ったと言える。

第2次世界大戦では、オーストラリアに徴兵制が導入された。そうせざるを得ないほどオーストラリア軍は兵力不足に陥っていたからだ。陸軍部隊は北アフリカの戦線に出征して、そこでドイツ軍との戦闘に投入されていた。そのすきに日本軍が攻めてきたのだ。オーストラリアは自国の統治下にあったニューギニアを日本軍の侵攻から守るために、徴兵した軍隊を送った。ともかく守りを固め、ヨーロッパ戦線に送られた兵が帰って来るのを待ったのだ。

人種差別的なオーストラリア人の中には、日本がオーストラリアまで攻めてきた時、アボリジナルの人々がどう反応するかを恐れていた者もいた。イギリス人は152年間、殺人とレイプと井戸に毒を入れるなど、非道なことをし続けていたのだ。そのため100万人いたアボリジナルの人々は1920年には8万人に激減していた。(6万人という説もある、と杉田さん) 少ないからこそお互いをよく知っている。南に行くほど色白になり、北に行くとは黒い。ダーウィンのあたりは、日本人や中国人との間に生まれた人もいる。それでも母はどこの出身かで、アボリジナルとしての出自がわかる。現在アボリジナルの人々はオーストラリア南東部に最も多く住んでいる。大陸中央部は砂漠地帯で住めない。そうした水の少ない、厳しい環境の中で、何万年も生きてきた。それだけの強靱さと規律を持っている。たとえ白人系であっても、アボリジナルはアボリジナルだ。

第2次世界大戦に出征したアボリジナルの兵士は、分かる限りで8000人ほどだ。北オーストラリアの海岸は、最前線の戦場だった。正規の軍人にならなくとも、何万人ものアボリジナルの人々がこの地域の防衛を支えていた。豊島が捕らえられて送られたバサスト島では、たった1人の白人兵が、アボリジナルの援助のおかげで島の警備の任務をとげることが出来たのだ。一方アボリジナルの人々にとっては、兵士になって戦争に行けば、初めてお金がもたらされた。それまでは全くの奴隷労働だった。戦争はオーストラリアを変えたと言える。戦争が始まった当初はオーストラリア軍やイギリス軍は、オーストラリアの南部から北海岸までの広大な海岸線の、どこにどう基地を作っていいかも分からなかった。しかしそこにアボリジナルの村があれば、それを足がかりに基地を造ることができた。アボリジナルの人々を労働者として雇い、お金を与えて様々な作業をさせた。古くからアボリジナルの労働者を使ってきた牛の牧場経営者は、ただ働きをさせていたので、軍が給料を払うのを嫌がった。軍はアボリジナルの人々の病気を治療したので、医療環境も向上した。父が冗談に言うには、「日本軍に感謝だ。おかげでアボリジナルの人権が高まった！」ということだ。第2次世界大戦は、植民地解放だけでなく、アボリジナル解放(先住民の権利向上)にもつながった。日本との戦争は、思った以上にオーストラリア社会に影響を与えている。

### (質疑応答)

**P研** : アボリジナルの兵士は、第2次大戦で北アフリカ、シンガポール、ボルネオにも出征したという

ことだが、ボルネオに行ったアボリジナル兵士の数はどのくらいか？

**オコネル**：当時の人口が8万人だったが、そのうち少なくとも8000人が出征した。どこに何人かという詳しい数字は今正確には分からない。博物館のHPに出ているので見てほしい。第1次世界大戦に出征したアボリジナル兵士は約1100人、彼らは大英帝国のために戦った。第2次世界大戦では8000人、自分たちのカントリーを守るために戦ったのだ。何万年も前からこの地に住み着いているアボリジナルの人々は、たかだか2百数十年の英国人より愛国心は強い。

**P研**：アボリジナルだけの部隊を作らなかったのはなぜか？例えば教育程度の差があったためか、反逆を恐れたせいかな？

**オコネル**：アメリカ軍では人種別部隊があったけれど、オーストラリアでは白人と統合されて同じ部隊に混ざった。アボリジナル兵だけの大隊を作って訓練すると、いつ自分たちに銃を向けてくるかわからないと恐れていた。また人種差別的な将校がいたら、アボリジナル兵の部隊をまず最前線に送って危険にさらすだろうという心配もあった。だからバラバラに軍に入った。ニュージーランドではマオリの人たちを集めてマオリの部隊が作られた。彼らがニュージーランドのために戦った、国のために尽くした姿がよく見えて、戦後市民権を得るのにも役立った。

**P研**：市民権を得たいから、自分たちで集まって戦争に行くということも無かったのか？

**オコネル**：その頃まとまったアボリジナル社会は無かった。最後のアボリジナル虐殺は1928年だ。第1次大戦に出征したベテラン（退役軍人）を警察官が殺しまくった。

**P研**：アボリジナルの人々は戸籍に入っていなかったもので、兵士に出来なかったのではないかな？

**オコネル**：1901年に英国はオーストラリア連邦を認めた。それと同時に有色人種の移民を制限した白豪主義がとられるようになったのだ。白人の国オーストラリアには、アボリジナルやアジア系は入れないという思想で、そのため子どもたちを親から引き離し、女の子を白人と結婚させて白い子を産ませるという政策が行われた。しかし1914年第1次世界大戦が起こり、戦争で犠牲者が出始めると、志願兵の基準がゆるんで、片親が白人ならいいということになり、やがて両親がアボリジナルでもいい、となった。また戦争の始めから、採用係りが「こいつはいい奴だから」と軍に入れてしまったりもした。

ウィンストン・イデの場合、父井出秀一郎はオーストラリアに50年暮らした。しかし第2次大戦が始まると、井出秀一郎は日本人として敵国人抑留所に収容された。そのような歴史はあまり知られていない。

大叔父のジョージ・ビールは直江津で亡くなっているけど、そのことで日本人を恨んではない。

### （懇親会で）

**オコネル**：私はこの度「ACT\*今年のアボリジナル」に選ばれて表彰された。スピーチを用意して行かなかったのがその場で困ってしまったが、まずその土地に敬意を表し、次にその土地のアボリジナルの部族に敬意を表した。これは決まったスタイルだが、思った通り会場は盛り上がった。

私のアボリジナルの友人たちは、アルコール依存になったり、病気で早く亡くなったりしている。差別は今も厳然としてある。

\*ATC：オーストラリア首都特別地域（Australian Capital Territory）



「私の親友はフレデリック・ビールの孫なんです」と話す参加者

（通訳：杉田弘也 記録：小宮まゆみ）

### 【おことわり】

この記録の4ページ16行目に「善通寺は日露戦争の捕虜や、第一次世界大戦のドイツ人捕虜がいたところでもあり…」という記述がありますが、日露戦争の捕虜収容所があったのは善通寺ではなく香川県多度津町で、第一次世界大戦の捕虜収容所があったのは香川県丸亀市でした。そのため上記文章の「善通寺」を「香川県」と訂正させていただきます。

また同ページ9行目と写真キャプションに「トランペット」という楽器名がありますが、この楽器をトランペットと特定できないため、「ラッパ」と訂正させていただきます。(2021年8月5日追記)